

報告

多様な専門分野のサンプル論文を用いた アカデミック・ライティングの指導法

佐藤 勢紀子*

本報告は、専門分野が多様な研究留学生のクラスにおける日本語によるライティング・スキルの指導法を論じたものである。専門分野による書き方の違いに対応するために、受講者自身に選ばせた自分の研究テーマに関連するサンプル論文の読解や分野別の練習を行った。論文構成力の養成にはサンプル論文の構成を検討することが有効であること、表現力の養成には論文でよく用いられる構成要素、展開パターン、典型的な文型・表現をサンプル論文から抽出する作業が効果的であることがわかった。

キーワード：留学生、研究のための日本語スキル、アカデミック・ライティング、サンプル論文

1. はじめに

日本の大学や大学院で学ぶ留学生にとって、日本語で論文を書くことが日本語学習の最終目標となっているケースが少なくない。筆者らが最近実施した留学生・外国人研究者対象の調査¹⁾では、目標とする日本語作文能力を「研究論文が書ける程度」とする割合が、分析対象とした回答者全体の45%（文系80%、理系37%）に上っている。また、日本語の論文を書く必要がなくても、授業のレポート、研究計画書、研究発表レジュメなどを日本語で書くことが求められる分野も多い²⁾。しかし、留学生等の作文能力は教員が期待するレベルに比べて有意に低く³⁾、留学生が学術的文章を書くためのアカデミック・ライティングのスキルを十分に習得しているとは言いがたい。

学術的文章を書くこと、すなわちアカデミック・ライティングにおいては、専門用語、研究方法に即したフォーマットなど、専門分野によって異なる学習項目も存在するが、学術的文章で用いられる基本的な文型・表現、学術的文章一般の構成や各部分の構成要素など、アカデミック・ライティングの土台となる、分野に共通した学習項目もある。二通・佐藤やアカデミック・ジャパニーズ研究会による開発教材⁴⁾は、日本語教員が、多様な専門分野の留学生を対象に、分野に共通した項目の指導が行えるように作られた教材で

ある。これらは、様々な専門分野の留学生を対象にレポートや論文の書き方を指導する際の好適なガイドになりうる教材である。特に後者は、文系と理系で論文の構成や文型・表現に違いがあることを明示し、多様な専門分野の45編の論文を素材とした33頁に及ぶ例文集を付けるなど、分野による違いに配慮している。

しかし、どの分野でも使えるということは、結局どの分野の学習者にも不十分であるということであり、これらの教材を用いただけでは、学習者の専門に応じた指導を行う上で限界があることは否めない^{5),6)}。学習者の専門分野の学術的文章の構成要素や文型・表現の特徴により即応したライティング・スキルを養うための指導法が必要とされている。

本稿では、東北大学大学院国際文化研究科の共通科目である研究スキル養成のための授業の実践報告を行い、様々な専門分野の研究留学生^{註1)}が共存する日本語クラスでアカデミック・ライティングの指導を行う際の効果的な方法について考察する。

2. 授業科目の概要

2.1 科目開設の経緯

東北大学大学院国際文化研究科は、1993年の教養部改組にともない、学部の教育課程を持たない独立研究科として発足した。文系・理系にわたる17講座からなり、2006年5月現在、修士課程・博士課程合わせて229名が在籍している。そのうち外国人留学生は

*東北大学高等教育開発推進センター教授

86名で、37.6%を占めている。

同研究科では、ほとんどの学生に研究上高度の外国語能力が求められること、独立研究科であるため研究の基礎的訓練が十分とは言えないこと、などから、外国語による研究スキルの養成が課題とされていた。これを受けて、2006年度より、研究科の共通科目として、「研究のための英語スキル」、「研究のための日本語スキル」という2つの授業科目が新設された。原則として、前者は英語を母語としない学生、後者は日本語を母語としない学生を対象とする。いずれも第1学期（4月～7月）に開講される2単位の授業である。

本稿は、これらのうち、同研究科に協力教員として所属する筆者が担当した「研究のための日本語スキル」（2006年度）の実践報告である。なお、この授業と、全学対象の日本語補講プログラム「東北大学外国人留学生等特別課程」の上級前期日本語応用の授業科目「P5」を同時に開講して合同授業とし、全学の留学生が受講可能な形式をとっている。

2.2 授業の目的

「研究のための日本語スキル」の2006年度の講義題目は「日本語による口頭発表と論文作成」であり、授業の目的と概要は、「研究活動に必要な外国語運用能力を高めることを目的に、日本語による効果的な口頭発表の方法および日本語による論文作成法について実践的なスキルを学ぶ」ことである。

また、学習の到達目標は、当初、(1)日本語で5分間のプレゼンテーションができるようになること、(2)3ページ程度の日本語論文を書くこと、であった。しかし、後述の事情により、実際には10分間の発表を行った。また、ライティングについては、「論文」のみならず「研究計画書」も可とすることとした。

受講者の主体は、修士論文執筆を最終的なゴールとしつつ、そのための研究計画の発表を当面の目標としている修士課程1年次学生である。このため、ライティングでは、特に発表レジュメおよび修士論文の書き方の指導が求められる。しかし、それらの指導は、各ジャンルの特徴に配慮する必要があるが、一般的な学術論文のライティング指導の枠内で行うことが可能であると考え、「論文作成」の指導を授業の眼目とした。

2.3 受講者

表1 受講者の専攻分野

所属部局	専攻分野	受講者数
国際文化研究科	言語文化交流論	6 (0)
	異文化間教育論	3 (1)
	科学技術交流論	4 (1)
	国際資源政策論	2 (0)
教育情報学教育部	IT教育デザイン論	1 (1)
工学研究科	技術社会システム	1 (1)
計		17 (4)

(括弧内はP5の登録者数)

受講登録者は21名で、うち17名が授業終了時まで継続的に受講し、発表を行った。17名のうち「研究のための日本語スキル」の登録者は13名、「P5」（上級前期日本語応用）の登録者は4名であった。受講者の専門分野は、表1から明らかなように、多岐にわたっている。受講者の身分は修士課程1年生が13名、2年生が3名、研究生1名であった。また、受講者の母語は、中国語13名、韓国語1名、モンゴル語2名、スペイン語1名であった。

3. 授業の方法

3.1 授業日程

授業日程を表2に示す。授業のなかばに研究計画発表会を実施したのは、受講者の大半を占める国際文化研究修士課程1年次学生がその3～4週間後に「研

表2 授業日程

回	内容	課題
1	ガイダンス	読解用論文の選択
2	書き言葉の特徴	
3	論文の条件	講義内容の報告
4	論文の構成	
5	序論の書き方	序論の文型を使った作文
6	本論の書き方(1) 方法 発表の仕方	研究計画書の作成
7	研究計画発表会(1)	
8	研究計画発表会(2)	
9	本論の書き方(2) 結果	
10	本論の書き方(3) 考察	引用と考察/原因の考察
11	結論の書き方 注・文献の書き方	
12	要約の仕方 討論の仕方	
13	研究発表討論会(1)	
14	研究発表討論会(2)	

(太字：論文作成の指導項目)

究題目発表会」で研究計画を発表することになってきたためである。その発表時間に合わせて、授業での発表時間も 10 分間とした。なお、国際文化研究科の 2 年次学生、研究生、同研究科以外の受講者の研究（計画）発表は、最後の研究発表討論会で実施した。

3. 2 教材

教科書として、アカデミック・ジャパニーズ研究会の開発教材⁹を用いた。この教科書は、文系・理系を問わず様々な専門分野の論文にほぼ共通して認められる構成要素や展開パターンを示している。主要内容例として、序論の構成要素と展開パターンを付録 1 に示す。また、受講者の専門分野に即したアカデミック・スキルを養うために、受講者の研究テーマに関連する内容の論文（以下、サンプル論文）や研究発表レジュメを教材として取り上げ、その読解・分析を通じて論文の構成や書き方への気づきを促すという方策を立てた。これらの教材については次節で詳述する。

3. 3 成績評価

評価は、課題作文 30%、研究発表 30%、学期末に提出する日本語論文 40%の割合で行った。

4. 分野の多様性への対応策

受講者の専門の違いに配慮したライティング指導を行うために、(1) サンプル論文の読解、(2) 分野別の練習を取り入れた。

4. 1 サンプル論文の読解

教科書にある学習項目の運用を促すためには、それらが実際に自分の専門分野の論文等で使用されていることを確認することが有用である。また、ある学習者の分野では、教科書に示された典型的な例とはやや異なる文型・表現や展開パターンが用いられている可能性もあり、そのことを発見することもその分野の学習者にとって重要である。

そのような見地から、読解用のサンプルとなる論文を収集するため、初回の授業で、各自の研究テーマに関連する論文のコピーの提出を求めた。提出された 17 編の文献のうち、論文としてジャンルが明記されているものは 6 編、研究発表要旨、研究ノート、レビューが各 1 編であった。残りの 8 編にはジャンルの記載がなく、概説的なものが多かった。

サンプル論文としては、原著論文と認定されたもので、バランスのとれた構成を持ち、各部分の展開パターンが明確なものが望ましい。しかし、今回の授業では、原著論文以外の研究文献も、各ジャンルのサンプルとして有用であり、また、利用目的によっては十分に教材としての役割を果たしうると考えられたため、明らかに研究文献からはずれるものを除いては再提出を求めることはせず、「サンプル論文」として扱った。

論文作成指導のほぼすべての段階においてサンプル論文を利用した。以下に具体的な利用方法を示す。

4. 1. 1 論文の構成の理解

論文の条件の一つとして、論旨が首尾一貫していることがある。そのことを認識させるために、序論と結論が問いと答えの形で対応しているかどうかを、サンプル論文を用いてチェックさせた。

また、サンプル論文の構成を示したリストを作成し、論文の適切な構成の仕方について検討させた。このリストは受講者に作成させてもよい。

4. 1. 2 本文の構成要素の学習

教科書によって、論文の構成要素、展開パターン、各構成要素を表す典型的な文型・表現を提示した後、サンプル論文から抜粋した数例の文章を示し、自分の専門分野に近いものを中心に、文型・表現のチェック、構成要素の記号の記入、展開パターンの認定などの練習を行わせた。練習の後、授業担当者が書画カメラを用いて、サンプル論文の当該部分を拡大コピーしたものにその場で記入する形で解答を示した。付録 2 に、序論の書き方の練習の解答例を示す。

4. 1. 3 論文要旨の書き方の学習

この練習は論文の本文の書き方の学習が終わった後に行った。論文要旨の構成要素とその展開パターンについて気づきを促すために、サンプル論文の中の論文要旨の例を取り上げ、注目すべき文型・表現に下線を引いて受講者に提示し、構成要素と展開パターンを認定させた。この練習を通じて、受講者は、論文要旨に、（目的の提示 ⇒ ）研究行動の確認 ⇒ 結論の提示という典型的な展開パターンがあることを自ら発見することができる。

4. 2 分野別練習

サンプル論文を利用しない練習や課題においても、

専門分野の違いを考慮に入れて出題の仕方を工夫した。以下、その主な例を列挙する。

4. 2. 1 書き言葉の特徴の理解

教科書の例文集に掲載されている実際の論文からとった例文を、口語表現を用いて書き換えて受講者に提示し、受講者の専門に近い分野の例文を中心に、論文らしい文章に改めさせた。問題例を付録3に示す。

4. 2. 2 文型・表現の学習

研究科の研究発表会や講座のゼミでの研究発表レジュメ 15 編程度のコピーを配り、2 人 1 組で、使われている文型・表現を書き出させた。受講者の専門分野にできるだけ近い分野のレジュメを配って検討させた。受講者が抽出した文型・表現をまとめて、参考資料として配布した。今回の授業では、国際文化研究科の過去の研究題目発表会の発表レジュメを利用し、研究方法を記述した部分についてこの練習を行った。研究計画発表レジュメ作成の基礎練習として効果的であった。

4. 2. 3 文型・表現の運用

論文の構成要素を表す文型・表現を1つずつ用いて、各自の研究テーマの内容で 50 字程度の短文を作らせた。今回の授業では、序論の書き方を指導した後、序論の7つの構成要素について作文を課した。

4. 2. 4 考察の書き方の学習

本論の考察の部分の書き方について指導した後、教科書第 9 課もしくは第 12 課の課題作文を授業時間外の課題として書かせた。前者では図表のデータを説明して原因の考察を行う展開パターン、後者では論点を提示して先行研究を引用し、自己の見解を述べる展開パターンを用いた。一般には、理系では前者、文系の多くの分野では後者が有用であると考えられるが、自分の研究に有用と見なされる方を選ばせた。また、教科書の課題の素材を使わずに、自分の研究テーマの内容で書いてもよいとした。

5. 授業評価

授業終了時まで受講を継続した 17 名の受講者を対象に、授業についての感想や要望を問うアンケート調査を実施した。15 名から回答があり、今後の授業実施の参考になる有益なデータや提言が得られた。以下、本稿の主な論点である多様な専門分野に応じた論文作

成指導についての意見を中心に報告する。

5. 1 専門分野の多様性についての意見

アンケート調査の中で、多様な専門分野の学生がいるクラスで研究のための日本語スキルを学ぶことについてどう思うかたずねた。

この質問に対しては、予想以上に多くの肯定的な回答が寄せられた。否定的な回答は 2 例にすぎず、その他「仕方がない」という回答が 1 例見られたほかは、すべて、多様な専門分野の学生が同じクラスで学ぶことに積極的な意義を見出していた。代表的な意見として、「いろいろな書き方を学ぶことができる」、「視野が広がる」、「いろ（ん）な専門分野の人と交流ができる」などがあつた。中でも、専門分野に応じて論文作成の相違点を教えてくれたので他分野への興味が生じ、良い点を学ぶことができた、という評価や、分野が違うからこそ内容にとらわれず形式的な面についていろいろアドバイスをもらった、という意見は、多様な専門分野の留学生が分野の違いを意識しつつ研究のためのスキルを学ぶことのプラス面を強調したコメントで、この授業の指導方針が間違っていないことを印象づけるものであつた。

5. 2 論文作成指導についてのコメント

アンケートのその他の部分で見られた論文作成指導についての主なコメントを以下に記す。回答の文体を統一し、助詞等の明らかな誤りは修正して記載する。

- a) 4 レベルの「論文作成」という授業¹²をさきに受けた方がいい。もちろん、この授業は役に立った。
- b) 学位論文をうまく書きたいとしたら研究のための日本語スキルを身につけた方がいい。日本語が上手にできても、正しい論文の書き方がわかるとは限らない。
- c) サンプル論文を利用した練習はいいと思う。まず、論文を捜すことにより、どういうのが論文として使えるかを勉強することができた。また、それらの論文を利用した練習も当然学生にとって大事なことだと思う。
- d) 自分の研究に密接的関係のある論文をサンプルとして説明してくれたので、分かりやすかった。論文の構造と表現の仕方が一目瞭然でよかったと思う。
- e) 論文なりの言い方、各構成部分のモデルを捜す練習が特に役に立った。
- f) この授業は論文を読むことにも役に立った。少し

ずつ要点を掴んで早く読むことができるようになってきた気がする。多分、論文の構成や、各部分の役割の勉強の効果だと思う。

g) 研究とは何か、どのようにやるのか、実は日本語のスキルの授業でわかった。

6. おわりに

本稿では、留学生を対象としたアカデミック・ライティングの指導法として、サンプル論文を利用した論文読解や、専門分野の違いを考慮した練習の方法を示し、それらが論文の構成を理解させ、その適切な書き方を習得させる上で効果的であることを示した。また、アンケートの回答からは、多様な専門分野の留学生がともに学ぶことの意義に着目し、その利点を生かすことが必要であるという示唆を得た。

今後の課題は、サンプル論文の選定や研究発表レジュメ作成の指導において、受講者の指導教員（専門教員）との連携をとり、より実効性の高いアカデミック・ライティングの指導体制を構築することである。

注

注1 大学院に所属する留学生のほか大学院入学の準備段階にある研究生や研修生も含めて研究留学生と総称する。

注2 日本語補講の中級後期作文の授業（W4）。P5と同じ教科書を用い、教科書に忠実に作文練習を行っている。

参考文献

- 1) 佐藤勢紀子・上原聡・崔絢喆・虫明美喜：日本語教育に関するアンケート調査- 留学生の日本語力を中心に-，東北大学国際交流センター紀要，第1号，pp.19-27 (2006)
- 2) 佐藤勢紀子・仁科浩美：留学生の専門日本語読解・作文に関するアンケート調査，東北大学留学生センター紀要，第2号，pp.45-52 (1995)
- 3) 二通信子・佐藤不二子：改訂版留学生のための論理的な文章の書き方，スリーエーネットワーク (2000)
- 4) アカデミック・ジャパニーズ研究会：大学・大学院留学生の日本語4 論文作成編，アルク (2002)
- 5) 二通信子・大島弥生・山本富美子・佐藤勢紀子・因京子：アカデミック・ライティング教育の課題，2004年度日本語教育学会春季大会予稿集，pp.285-296 (2004)

- 6) 因京子・大谷晋也・仁科喜久子・深尾百合子・米田由喜代・村岡貴子：日本語論文作成支援リソース再考- 理系専門日本語教育の観点から-，第8回専門日本語教育学会研究討論会発表要旨集 (2006)
- 7) 東北大学大学院国際文化研究科：平成18年度授業概要 (シラバス) (2006)

付録1 序論の構成要素と展開パターン

【構成要素】

- a. 研究テーマの説明
- b. 課題の提示 (b₁. 問題の指摘 / b₂. 論点の提示)
- c. 問題解決の必要条件の提示
- d. 先行研究の紹介
- e. 先行研究の問題点の提示
- f. 研究目的の提示
- g₁. 研究行動の提示

【展開パターン】

- [1] a ⇒ b ⇒ f
- [2] a ⇒ b ⇒ g₁
- [3] b₁ ⇒ c ⇒ f
- [4] b₁ ⇒ c ⇒ (そこで,) g₁
- [5] a / b ⇒ e ⇒ f / (そこで,) g₁
- [6] a / b ⇒ d ⇒ (しかし,) e ⇒ f / (そこで,) g₁
- [7] a ⇒ b ⇒ d ⇒ (しかし,) e ⇒ f / (そこで,) g₁

付録2 序論の書き方 練習問題の解答例

1. はじめに

- 恩恵の授受を表す「補助動詞」と呼ばれているものに「てくれる」「てあげる」「てもらう」がある。
- a { (1) 花子が健に英語を教えてあげた
(2) 花子が私に英語を教えてくれた
(3) 健が花子に英語を教えてもらった
- d { 一般に「てくれる」は、「てあげる」と共に恩恵の与え手が「が」格の主語であるという意味で同視され、恩恵の受け手が主語である「てもらう」と対比される。従って、「てくれる」は、「話者のために他人がある行為をし、それによって利益・恩恵を受ける意を表す (広辞苑第五版 p.797)」とされ、利益・恩恵の受け

e { 手が話し手であることを除いては「てあげる」と同じ機能を持つと**言われている**。**しかし**、一方で、下記の例文のように利益・恩恵の与え手であるべき主語が無生物であることもあり、**問題が指摘されている**。

(4) a 車が直ってくれた
b* 車が私の為^に直ってくれた

f { 本稿の主目的は、「てくれる」の意味機能を「てあげる」との対比において明確にする**ことにある**。**以下**、従来の考えが抱える**問題を再整理し**、主観的表現「ありがたいことに」との共起性を根拠に「てくれる」が周りで起こるある出来事に対する話し手の利益・恩恵の感情を表す表現であり、「てあげる」とは受益者を超えた違いがあること**を提案する**。提案の根底には、解釈できることと文の構成要素であることとは別であるという考えがあり、「てくれる」の用法に関して一貫した説明を可能にしている。又、「てくれる」の拡張的用法としての話者の不利益・迷惑の感情表現、聞き手との共起性**についても述べる**。

g 1 {

付録3 書き言葉の特徴 練習問題

問 次の文の中で論文の表現として不適切な部分に下線を引き、適当な形に改めなさい。なお、括弧の中の数字は、不適切な部分が何箇所あるかを示している。

1. 中国では、経済が急激に発展しているとともに都市化も進展して**いて**、早急に適切な対応をとらなければ、**もう**報じられている現状の環境問題が**もっと**深刻になっていくことは、**色々な形**で指摘されてきている。

(4)

2. そのため、**私たちは**、厨房生ごみに代表される高含水率有機廃棄物の超臨界水湿式酸化に関する研究を**空**った。(2) **そうしたら**、500℃では十分に反応は進行する**けれども**、400℃**ぐらい**の温度では比較的安定な中間生成物として**たくさんの酢酸**が残存することがわかった。(4)

(以下略)

展開パターン：[6]

出典：参考文献(4) p. 103, p. 105

出典：山橋幸子「「てくれる」の意味機能- 「てあげる」との対比において-」『日本語教育』103, pp. 21-30, 1999)

※ 口語表現に改めた箇所に下線を付した。実際の練習の時には下線は付けない。

Teaching Academic Writing with Sample Articles in Various Research Fields

SATO, Sekiko

Center for the Advancement of Higher Education, Tohoku University

This report is focused on how to improve writing skill in Japanese at a class of international graduate students from various research fields. In order to cope with the difference in writing method among various fields, the author let the students choose sample articles related to their research subject as reading materials. Besides the author prepared exercises according to each student's research field. The class activities made it clear that it is useful to investigate the construction of the sample articles to improve students' skill of structuring research papers. Also it became clear that exercises in extracting constituents of articles, discourse patterns and typical expressions form sample articles are effective to enable the students to write research papers properly.

Keyword: *International Students, Research Skill in Japanese, Academic Writing, Sample Articles*